

國學院大學學術情報リポジトリ

On an Auxiliary Verb “Ramu” in Kikuyō Wakashū
: As Addendum to the Study of “Ramu” in Shin
Shoku Kokin Wakashū

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 色川, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000953

『菊葉和歌集』における助動詞「らむ」について ——『新統古今和歌集』の「らむ」研究補遺を兼ねて——

色川 大輔

キーワード：『菊葉和歌集』・使用率・疑問語・『新統古今和

歌集』・「姉小路式」

一、はじめに

本稿は十四世紀末頃に編まれた私撰集『菊葉和歌集』の助動詞「らむ」を調査し、検討を加えたものである。

先に、『菊葉和歌集』の紹介を兼ねて、現存『菊葉和歌集』の語学研究資料としての可能性と、語学資料として用いられたことの無いことを述べる。

第一に所収和歌総数に対する助動詞「らむ」の使用率について検討する。『菊葉和歌集』の「らむ」を含むいくつかの助動詞について、勅撰和歌集と四季部における使用率を

比較した研究が先行研究としてあることから、「らむ」に限った場合の同様の集計を筆者の扱える数点の勅撰和歌集と合わせて行い、検出した数値の意味を検討する。

第二に助動詞「らむ」と疑問語との関係について検討を行う。参考文献一七にまとまった集計と考察があり、筆者もいくつか集計を出したことがある。本稿はこれまでにある研究を増補するものである。

合わせて、『菊葉和歌集』と直接の接点はなく、後れること四十年ほどの後に成った『新統古今和歌集』について、比較を兼ねて記したところがある。

『菊葉和歌集』は参考文献一一を使用した。勅撰和歌集は参考文献一〇を使用した。

二、資料『菊葉和歌集』について

本稿が資料とする『菊葉和歌集』についての現在における認識は、大略以下のように記述されるものである。

持明院統の伏見宮に仕えた今出川（菊亭）家の人々と、伏見宮貞成親王（後崇光院）によって編纂された集。菊葉の名は貞成親王の暮らした今出川（菊亭）家生活圏を意識している。編纂開始時期は未詳であり、応永三三〇年（一三六三年）から五年頃発企、集内詞書等から推察して成立は応永七二〇年四月から九月頃までか。伝本は後崇光院自筆本を祖とする一系統であり、書陵部に後崇光院自筆本二種（巻一〜三および巻七〜一三）、及び巻一から巻六の伝本二種、他に内閣文庫本（巻一〜六）が存する。『新編国歌大観6』は書陵部蔵本の取り合わせ本、『続群書類従』巻三七二にも入るが、続群書類従本は、内閣文庫本と書陵部蔵自筆本（巻七〜一三）の転写本の取り合わせ本である。現存本は、春（上・下）、夏・秋（上・下）・冬・賀・旅・恋一〜五の一三巻であり、本来は二〇巻仕立てであったが、巻一三巻

尾以下は散佚したと考えられる。現存本の総歌数は一四八五首（一首欠）。入集歌人は、御製、崇光院、從二位榮子、從三位政子、今出川公直、今出川実直、庭田重有、三善為徳、三善直衡らであり、御製は貞成父榮仁親王、從三位政子は貞成親王、從二位榮子は治仁王の仮名。歌数は、今出川実直二三一首、從三位政子二四首、三善為徳一四九首、今出川公直一一九首、庭田重有七五首等が多く、集歌の詠風には京極派和歌の特徴が残る。なお、貞成親王は從三位政子の名の外に源経定、読み人しらずとしても入集し、集の三割以上の歌を占め、菊亭の人々の詠で八割以上となるなど、菊葉集はごく小さな集団の詠歌を集めた集であった。仮名序によれば、将来の勅撰集撰集に備えて、特に貞成親王近辺の和歌収集と整理を目的とした編纂であったが、世に出ず、『新続古今集』の撰歌資料ともならずには終わった。（参考文献一八。一三九頁・二四〇頁）

本稿では『菊葉和歌集』についての説明はこの紹介を以て代えることにする。ここに至るまでの研究史の紆余曲折には興味深いものがあるが、ここでは触れない。

『菊葉和歌集』を取り上げた国語学日本語学的研究は絶無のようである。管見の限りでは、内部徴証や内容の検討のために行われた若干のものを除いては、見られなかった。

右の紹介文に見えるように、撰集に関与したと見られている後崇光院貞成親王自筆の本が一部とは言え伝存しており、零本とは言うものの、魅力的な資料であるはずである。言語資料としては、十四世紀末頃の文語資料として、いづれ相応の位置を得るべきものと考ええる。『菊葉和歌集』の語学的資料価値の發揮は、一に後世に委ねられている。

三、助動詞「らむ」の使用率の分布

『菊葉和歌集』の助動詞「らむ」を取り扱った研究として、伊藤敬「伏見宮貞成―北朝和歌終焉考―」（参考文献二所収）がある。伊藤氏は、参考文献九を引きながら、以下のよう述べる。

歌風を測る形態的特質の一つに、推定助辞使用率がある。それは構文・叙情・叙事の上で、古今集調の都合の目安となる。（一二二頁）

常縁詠は極端例にならうが「らん」が約四百首の中

の百首に及ぶ。他に、らし・ましもある。なお飛鳥井雅縁・雅世・雅永に触れられたところでも「推定の助詞多く、主観的要素が濃厚である」とする。

右は室町期の歌人についてであるが、菊葉集とは半世紀ほどの差である。参考になる。そこで斎藤氏の言う推定助辞を「らむ・らし・まし・めり・べし・けむ・む・じ」の八助動詞に広げて勅撰二十一代集での使用数比を取ると、四季部総歌数対使用歌数の割合（％）は次のようである。（一二二頁）

今撰	28
遺	24
遺	27
拾	22
金	31
詞	28
千	26
新	20
新	22
統	27
統	32
統	24
新	27
新	13
統	23
統	28
統	13
統	25
統	30
統	23
統	23
統	23

まずは八代集中での新古今集の低さが目立つが、際立つのが、玉葉集と風雅集の二集である。前記の東常縁・飛鳥井の人人の詠を二条歌風とすれば、この二集の推定助辞使用率が京極派の特色を示すと言える。

ここで菊葉集を調べてみると、玉葉・風雅集に近く、16%と集計される。外形的特質として、この三集の類似性に注目しておきたい。(一二二頁)

ここでは、対象を本稿の主題である助動詞「らむ」に限り、『菊葉和歌集』と筆者のこれまでに数値を出したことがある五の勅撰和歌集とについて、伊藤氏に倣って使用率を出して検討する。

『千載和歌集』・『新勅撰和歌集』・『続後撰和歌集』については、異本歌があり、総計には異本歌を含む。

『菊葉和歌集』が第一巻から第十三巻までの零本であることから、勅撰和歌集については、比較のため、総数の他に、第一巻から第十三巻までに限定した集計を示す。

また、伊藤氏の集計との比較をするため、四季部のみに限った集計も合わせて掲げる。

一覧中で用いた用語の内容は以下のとおりである。

「総歌数」 文献全体または集計範囲に収録された和歌の総数を指す。

「使用歌数」 助動詞「らむ」の用例がある和歌の総数を指す。

「使用数」 助動詞「らむ」の用例数を指す。一首の和

歌に複数の用例がある場合があり、「使用歌数」と分けて示した。

「使用率」 「使用数」を「総歌数」で除した結果。百分率で小数点以下第一位まで示した。

『菊葉和歌集』

総歌数 使用歌数 使用率

総計 一四九〇 一二五 一二五 八・四%

四季部 九四二 九一 九一 九・七%

『古今和歌集』

総歌数 使用歌数 使用率

総計 一一一 一一五 一一六 一〇・四%

卷十三まで 六七六 七九 八〇 一一・八%

四季部 三四二 五一 五一 一四・九%

『千載和歌集』

総歌数 使用歌数 使用率

総計	一二九〇	一七三	一七三	一三・四%
卷十三まで	八三九	一二〇	一二〇	一四・三%
四季部	四七五	七六	七六	一六・〇%

『新勅撰和歌集』

総計	一三八二	一五〇	一五〇	一〇・九%
卷十三まで	八六〇	九五	九五	一一・〇%
四季部	四四二	五四	五四	一二・二%

『続後撰和歌集』

総計	一三八一	一五六	一五六	一一・三%
卷十三まで	八六三	一〇七	一〇七	一二・四%
四季部	五二九	六八	六八	一二・九%

『新統古今和歌集』

総歌数	使用歌数	使用数	使用率
-----	------	-----	-----

総計	二一四四	二八四	二八四	一三・二%
卷十三まで	一三三二	一七三	一七三	一三・〇%
四季部	七四四	一一三	一一三	一五・二%

助動詞「らむ」に限って言えば、四季部での集計の使用率は、いずれの撰集においても、総計におけるものよりも高率になる傾向がある。主題の特性が窺える。

四季部における率を伊藤氏の集計と比較してみると、伊藤氏の調査した八種の助動詞のうち「らむ」がいずれの集においても過半数を占めていることが判る。

総計を見ても四季部に限って見ても、伊藤氏の指摘どおり、『菊葉和歌集』は他の撰集より使用率が低い。『菊葉和歌集』が「らむ」の使用に抑制的であることを示す数値である。この低さは主流派に対する反発とも位置づけうるし、その表現の特性にも結びついている可能性がある。

『千載和歌集』が顕著な高率を示している。伊藤氏の集計を参照すると、『古今和歌集』と『千載和歌集』と『続後撰和歌集』との間には、八種の助動詞の使用率では二%の

差しか無いが、助動詞「らむ」について見ると、『千載和歌集』における使用率は顕著に高く、八種で見ればより高い『古今和歌集』・『続後撰和歌集』よりも高い。

『千載和歌集』に次いでいるのが『新続古今和歌集』である。この集については、伊藤氏の集計を参照すると、八種の助動詞のうち「らむ」が占めている比率についても、他の勅撰集に比べ、相当の高率になっているようであり、特徴的である。この点は、『菊葉和歌集』とも共通していると言えるかもしれない。

四、疑問語との併用について

筆者はかつて、勅撰和歌集等に用いられた助動詞「らむ」の疑問語との併用の有無について、参考文献七において、参考文献一七をはじめとした松尾氏の研究と、筆者自身が行った集計をまとめて示したことがある。ここに一部修正し、『菊葉和歌集』を合わせたものを示す。

『菊葉和歌集』総計一二五例

疑問語なし 一八例（約一四％）
疑問語あり 一〇七例（約八六％）

『万葉集』（松尾氏）総計二二七例

疑問語なし 一〇八例（四八％）
疑問語あり 一一九例（五二％）

『古今和歌集』（松尾氏総計一二二例・色川総計一一六例）

（松尾氏）疑問語なし 三六例（三〇％）
疑問語あり 八六例（七〇％）

（色川）疑問語なし 四四例（約三八％）

疑問語あり 七二例（約六二％）

『千載和歌集』（色川）総計一七三例

疑問語なし 二三例（約一三％）
疑問語あり 一五〇例（約八七％）

『新古今和歌集』（松尾氏）総計二二七例

疑問語なし 三六例（一五％）
疑問語あり 一〇五例（八五％）

『新勅撰和歌集』（色川）総計一五〇例

疑問語なし 二九例（約一九％）
疑問語あり 一二一例（約八一％）

『続後撰和歌集』（色川）総計一五六例

疑問語なし

一六例(約一〇%)

疑問語あり

一四〇例(約九〇%)

『新統古今和歌集』(色川) 総計二八四例(※)

疑問語なし

一八例(約六%)

疑問語あり

二六六例(約九四%)

分布としては、『千載和歌集』以降の中世勅撰和歌集と比して、『菊葉和歌集』を取り分けて異とする点があるようには見えない。『菊葉和歌集』は『新統古今和歌集』や「家の三代集」を通して見える傾向の上にある。

ここで筆者の想起するのは、助動詞「らむ」についての語法学史を語る際にもよく知られた、「姉小路式」冒頭「はねてにはの事」の次の記述である。

「姉小路式」(『天仁遠波十三ヶ条口伝』)

はねてにはの事。覽とうたかはんには。か。かハ。かも。なに。など。いつ。何国。いかに。いか成。いかてか。幾度。誰。何れ。是等の言葉のいらすしてはねられ侍らぬにぞ。(参考文献一三。五頁・六頁。句点を補った)

これは参考文献一七の

斯の如くして新古今のらむの疑問体は八五%にも達し、遂に中古の語法家をして次の如く説かしめるに至つた。(二六九頁。漢字の字体を改めた)

と評するところであり、ここまでの和歌史のしからしめたものとされる。『菊葉和歌集』も「姉小路式」の語るところの傾向に沿っているとひとまずは言えるであろう。

さりながら、『続後撰和歌集』との差は百数十年を経るものなのでもかく、『新統古今和歌集』と比して一割近くの差異があることは、ひとまず注目に値するものである。

『新統古今和歌集』の撰集当時、後崇光院貞成親王は存命である。親王自身の歌風の変遷は既に論じられているところであるが、同時代的でありながら大きな相違を示していることは、両集の歌風の相違を反映していると考えられる。

なお、右の一覧中「※」を付した『新統古今和歌集』の集計については、一例について疑問語有無の分類についての見解が、参考文献八の発表時から、筆者の中で変わったため、かつて示したものと相違がある。具体的な説明は本稿末の附節にて行う。

五、「姉小路式」「はねてにはの事」について

ここでは「姉小路式」の「はねてにはの事」の成書について考えてみる。

『菊葉和歌集』は後統の勅撰和歌集『新統古今和歌集』と同時代性のある撰集である。『新統古今和歌集』に比して『菊葉和歌集』は助動詞「らむ」と疑問語との結びつきが緩やかであったが、結びつく傾向は他の撰集と同様に持っていたことを見た。

「姉小路式」の冒頭「はねてにはの事」と類似の認識を『新統古今和歌集』の撰者飛鳥井雅世が持っていたであろうと参考文献四で述べた。「はねてにはの事」様の認識は、京極派風とも基盤を共有することが窺える。先行研究でも考えられているように、一般的なものであったのであろう。

しかし程度の差も窺える。先行研究では流派について考えられた様子がないが、この差は京極派と飛鳥井家または二条派とを分ける性質のものと考えてみたい。

『新統古今和歌集』が示す強い疑問語併用専用の傾向は、筆者が以前述べたような、ただの時代的な推移によるもの

ではなく、より強く意識的に推し進め形成せられたものではないかということ、『菊葉和歌集』という、より近い時期に編まれた、歌風を異にするものとの比較により、考えさせられる。

疑問語併用を当然とするあり方、疑問語併用専用への傾きは、京極派も持っていたようである、当時歌学の一般的傾向であるが、傾向はそれだけでは成書成文たりえない。傾向があることと一書となることには深い懸隔がある。傾向を突き詰め、彫琢し、撰集に結実させるような強い意識化無くして、「姉小路式」は生まれないのであろう。『新統古今和歌集』のあり方は、「姉小路式」の成立と同じ地平に立つ力を感じさせるものがある。

六、飛鳥井家歌学と「姉小路式」「はねてにはの事」

本節表題に飛鳥井家の名を出したが、本稿は「姉小路式」飛鳥井家編述説を唱えるものではない。

「姉小路式」の編述が飛鳥井家によるものでなくとも、『新統古今和歌集』から窺える助動詞「らむ」についての方法論は、書記すれば「姉小路式」の「はねてにはの事」と同

様のものとなろうと考えていることは前述した。

京極派の撰集に見える伊藤氏の所謂「推定助辞」の使用率の低さは、京極派の独自性を示すものであり、その系譜に『菊葉和歌集』もあるとされることは、助動詞「らむ」に限り、残巻全編を見た本稿でも同意するところである。

この低率を「らむ」への関心の低さと見れば、京極派撰集のあり方は「姉小路式」の「はねてにはの事」の記事を生むほどの関心を感じさせるものとは思えない。

飛鳥井家と「姉小路式」を結びつける徴証のようなものは以前から指摘されていることをまとめておく。例えば、参考文献一は、「姉小路式」の伝本の一について、以下のように述べている。

姉小路式の系統のものでは、以上の外に『飛鳥井家
和歌式』といふのがある。これは後土御門、後柏原の
御代の人飛鳥井雅俊から伝はつたものである。(二五
一頁)

また、根上剛士「姉小路式の研究 二三」(参考文献一二所収)には、

B9 秘伝天爾波抄 宮内序書陵部藏 内題同じ

「飛鳥井家題詠大意」と合綴。(二一九頁・二二〇頁)と、「姉小路式」の諸伝本の中に、「飛鳥井家」の名のある文献と合綴されているものがあることが見える。

飛鳥井家と「姉小路式」との関わりが、茫洋としたところから漠然と感じられる中で、根来司「手耳葉口伝」(参考文献一四所収)は永和元年の奥書を持つ「姉小路式」の一本「手耳葉口伝」について、以下のように論じる。

その作者は井上氏が先にあげた柳原忠光、徳大寺実時、今出川実直、洞院公定らの誰でもなく、この飛鳥井雅家あたりではないかと思われる。それは飛鳥井の家は他の家と違って歌道秘蔵録と深くかわりがあり、現に飛鳥井家和歌式などがあるからである。(九三頁・九四頁)

管見では「姉小路式」の編述と飛鳥井家とを直接に結びつけたのは、この根来氏の論を初めとするように思う。この見方に対して、根上剛士「八代集手爾葉」と『和歌手爾葉伝授』(参考文献一二所収)は、次のように述べる。

近年、いわゆる「姉小路式」の原著といふべきものは、飛鳥井家の人によってなされたという説も提起さ

れている。飛鳥井家のてにをはに關する伝書、及び家学（歌学）については、今後更に研究する必要があることはいうまでもない。しかし、この説に対しては、本稿の筆者は、いわゆる「姉小路式」が、飛鳥井家の人の手になるとは考えられないという立場をとる（二六四頁）

根上氏の論ずるところは、東北大学附属図書館蔵『和歌手爾葉伝授』の合わせるところを参照すれば、飛鳥井雅俊の著作『八代集手爾葉』は「姉小路式」と重複するところがないので、「姉小路式」は飛鳥井家歌学を發祥とするものとは見られないということであろう。

『新統古今和歌集』から窺える助動詞「らむ」についての方法意識は、文字にすれば「姉小路式」の「はねてにはの事」と同様のものとなるものであろうことは、想像に難くない。ここから見るに、「姉小路式」の編述が飛鳥井家によるものでないとしても、「姉小路式」の担い手は、様々な物証がほのめかすように、やはり二条派の人々だったのでないだろうか。

七、おわりに

本稿は、『菊葉和歌集』という材を借りて、国語日本語史ならびに国語学日本語学史について、想像を繰り広げてみたものである。

『菊葉和歌集』という时期的に近く歌風を異にする撰集という好資料を得たため、別の姿を見ることが可能になった『新統古今和歌集』について記述することが多くなった。「姉小路式」の「はねてにはの事」と類似の傾向を『新統古今和歌集』のみでなく、助動詞「らむ」使用を比較的控えていたようである『菊葉和歌集』も持っていることから、当時の歌壇一般の趨勢であったと見た。

「姉小路式」が編述される主力は二条派の人々によって担われたのではないだろうかと筆者は考える。『春樹頭秘抄』以降の増広流伝を担った人々を考えても、それが自然ではないか。

顧みて、『菊葉和歌集』内部についての考察は出来ていない。本稿では『菊葉和歌集』における「らむ」の使用率の低さを「関心の低さ」と言ってはみたが、その具体的な姿に

ついでには見ていないので、ただの当て推量に過ぎない。詳細な計量的分析、他の撰集との精細な比較など、すべきことを殆どしていないことは憾みである。

附節、『新続古今和歌集』の用例について

四に述べた本稿において参考文献四から帰属を変更した例について、ここで解説する。対象は次の一首である。

いづくにも衣うつなり秋風や里をばかれず夜さむなる

らむ（五三〇番、藤原俊頼朝臣。七三三頁）

参考文献八では「秋風や」の係助詞「や」を「夜さむなるらむ」の「らむ」と呼応する疑問表現を構成していると考え、これを「疑問語あり」に分類した。しかし、「秋風が夜さむなるらむ」という擬人表現と考える必要も無い。

そこで本稿ではこの例を「秋風や里をばかれず」で本来係結びを形成しているところ、結びが「流れ」を来して、「らむ」で結んでいるような外形を示しているものと考え、「疑問語なし」に分類した。

この歌の下三句は、「秋風の里をかれずや」といった句と類似の表現意図であり、「秋風や里をばかれぬ」（ソレデ）

「夜さむなるらむ」という形の原因・理由の表現になるべきところだったのだろうと考える。

それがこのような形の文になったのは、音数律の都合により係助詞「や」を「秋風」の句に属させたことと共に、助動詞「らむ」は疑問語と呼応するものと考えられていたと思われること、そして、終止している上文を「らむ」の疑問の原因・理由とする、『古今和歌集』に見える

むかしべや今もこひしき郭公ふるさとにしもなきてき

つらむ（一六三番歌、ただみね。一三頁）

のような、上述したところの文章構成法が衰退していたようにも思われることなどが理由となるだろうと考える。

「疑問語あり」専用化が伸張しているということは、「疑問語なし」の表現法の種類や幅の貧困化を兼ねてもたらずであろうことは想像に難くない。

また、右の『古今和歌集』歌に見える文章構成法に従うと、二句で切れ、更に四句で切れるという、三文構成になつてしまふことも嫌われたのかもしれない。

【参考文献一覽】（編著者指名の五十音順に排列し、同一編

著者名の中は発表年月順に排列した）

- 一、安藤正次『国語学概説』（広文堂、昭和四年三月）
- 二、伊藤敬『室町時代和歌史論』（新典社、平成一七年一月）
- 三、井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』（風間書房、昭和
三六—二月初版、昭和五九年六月改訂版）
- 四、色川大輔『新続古今和歌集』の「ラム」（「国学院大学大学
院紀要 文学研究科」第三九号、平成二〇年三月）
- 五、色川大輔『家の三代集』における助動詞「ラム」の用法に
ついて（「国学院大学大学院紀要 文学研究科」第四〇号、
平成二二年三月）
- 六、色川大輔『さればが含蓄されて居ると見れば—助動詞「ら
む」の語法をめぐる批判史覚書—』（「国語研究」第八〇号、
平成二九年二月）
- 七、色川大輔『武家歌人今川氏真の詠作における助動詞「らむ」
について—疑問語との結びつきをめぐって—』（「国学
院雑誌」第一一八巻第六号、平成二九年六月）
- 八、色川大輔『此のらむは静心なくを受くるなり—或る「新
説」の解釈史上における位置について—』（「国学院雑誌」
第一一八巻第一二号、平成二九年一月）

九、齋藤清衛『近古文芸思潮史 応永・永享篇』（明治書院、昭

和一年一月）

- 一〇、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第一卷
勅撰集編 歌集』（角川書店、昭和五八年二月）
- 一一、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第六卷
私撰集編Ⅱ 歌集』（角川書店、昭和六三年四月）
- 一二、根上剛士『近世前期のてにをは書研究』（風間書房、平成
一六年三月）
- 一三、根来司解説『姉小路式・歌道秘蔵録・春樹顯秘抄・春樹顯
秘増抄』（勉誠社、昭和五二年二月）
- 一四、根来司『てにをは研究史—てにをは秘伝書を中心とし
て—』（風間書房、昭和五五年八月）
- 一五、野村剛史『三代集ラムの構文法』（川端善明・仁田義雄『日本
語文法 体系と方法』（ひつじ書房、一九九七年一〇月）所収）
- 一六、松尾捨治郎『国語法論攷』（文学社、昭和一年九月。白
帝社、昭和三六年一月追補版）
- 一七、松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』（
文学社、昭和一八年二月）
- 一八、和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ラ
イブラリー、平成二六年一月）